

連載
第8回
福聚山史

篠原 重一
及川 晋一
編 文

古記録に見る常円寺

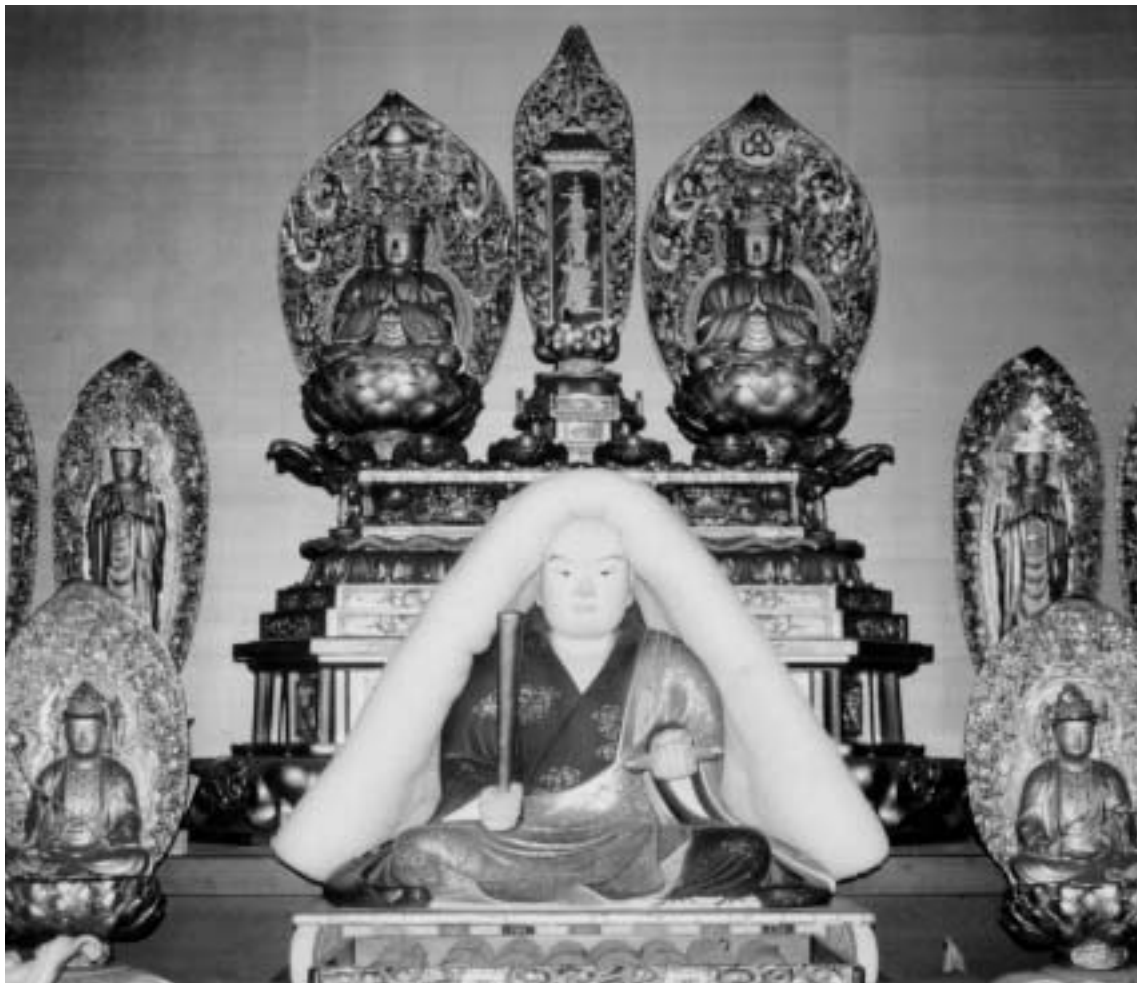
4、『日蓮宗明細簿』に見る常円寺

〔光圀公寄進のご本尊〕

『文政寺社書上』には、客殿(=本堂)の本尊は、「宗法之通諸尊安置」との記述があるが詳細は書かれていない。しかし、明治十年の『日蓮宗明細簿』には本尊について次ぎのように書かれている。

宝塔中、「題目」「多宝」「釈迦」、「四菩薩」「四天王」「文殊」「普賢」「不動」「愛染」「日蓮」但し、木像十五軀
祖師堂には、「日蓮」「大黒天」「二軀妙見堂には、「妙見」「清正」「二軀

本堂には、日蓮宗の本尊とされる、「一塔兩尊四土」と呼ばれる仏像があり、それは「南無妙法蓮華經」の七文字を記した題目塔を中心として、その兩脇に「二仏並座の「釈迦」「多宝如来」、さらに「上行・無辺行・浄行・安立行」の四菩薩のほか諸尊を上段に安置し、その前に「日蓮聖人」像といった配置がなされている。それは日蓮宗の習わしに従って安置されていたものと思われる。なお、明治四十四年の『東京名所図会 西郊の部 常圓寺の項』には、



常円寺本堂のご本尊

表門は其の西に當る黒色門にて内に浄行菩薩の石像を安置す
という記載がある。いつの時からか分からぬが、石像の浄行菩薩が表門の内部に安置されていたのであろうか？

また、『文政寺社書上』には前記の諸尊仏の造立施主は水戸光圀公であると記載されている。なぜ、あの『黄門さま』が……と誰しも思うだろうが、水戸光圀公と宗教との関係は深く、『日蓮宗小辞典』には次のごとく記載されている。

徳川御三家の一つ水戸藩の二代藩主光圀(一六一八―一七〇〇)は、幕府の新設寺院禁止令にもとづいて、領内の新設寺院の整理を行い、また淫祠を廃止し、由緒ある寺社を復興するなど宗教制度の是正を実施した。法華經の信者であった母久昌院の十三回忌にあたり、久昌寺を建立した。

また、光圀公は千葉県安房小湊町にある日蓮宗誕生寺にもゆかりが深く、明応七(一四九八)年と元禄十六(一七〇三)年の二度にわたる地震・津波による災害で多くの諸堂が流出したものの、誕生寺二十六世日孝上人の時、光圀公が援助を行って再興したという。光圀公が常円寺にご本尊を寄進したのはいつ頃のことなのか、どのような関係からなのか……など、残念ながら分からない点も多々ある。光圀公が藩主に就任した寛文元(一六六一)年の頃といえば、ちょうど常円寺が寺院としての体制を整え始めた時期であったと想像できる。その常円寺の発展をいずれかの者より漏れ聞き、誕生寺の再興に尽力したごとく、外から援助の手を差し伸べたのではないだろうか。

(つづく)